

京都産業大学 ことばの科学研究センター 2023年度第5回研究会

11月22日（水）14:00～16:00
4号館2階総合学術研究所

18世紀ドイツにおける文芸批評の広がり
—レッシング『ラオコオン』をめぐって
山取 圭澄（外国語学部 助教）

18世紀ドイツの作家レッシングの『ラオコオン』は、「詩と絵の境界」という副題が示す通り、古代ギリシャの大理石の彫像ラオコオン群像を手掛かりに、詩と絵画という二大芸術の表現上の特徴をテーマにした著作である。したがって、『ラオコオン』は、主として芸術論や記号論の方面の題材として取り扱われることが多かった。しかし、出版当時の書評や評論からは、この著作の独特の構成が注目されていたことがわかる。思想家ヘルダーなどは、レッシングに匹敵する著述家はいないと述べ、新たな文芸批評のあり方を見出している。本発表では、こうした同時代の評価を参照しながら、批評文学としての『ラオコオン』の形式的な特徴を論じていく。

ドイツ語訳テキストの中の「オノマトペ」表現：
宮沢賢治『銀河鉄道の夜』のドイツ語訳を中心に
島 憲男（ことばの科学研究センター員・外国語学部教授）

本発表は2021年に出版された、宮沢賢治による『銀河鉄道の夜』のドイツ語訳作品 *Eine Nacht in der Milchstraßenbahn* を取り上げ、原典に生起する擬音語・擬態語表現がどのようにドイツ語に翻訳されているかを調査した結果を報告する。合わせて、ドイツ語のオノマトペ表現についての発表者によるこれまでの研究成果を検証していきたい。